

# カール・バルトのキリスト教倫理 「結婚」について

沼 田 俊 雄

## はじめに

1999年度の教養科の修養会のテーマが「結婚」であった。これは学生が今後数年にして出会わなければならない人生の最大のテーマの一つであることは間違いない。しかし、現代の社会において、これほどに混乱し、また危機に瀕している問題もないのではないだろうか。キリスト教が現代社会において、人生を生きる指針となり、生きる力となるためには、この結婚の問題についても、明確な発言ができるものでなければならない。

カール・バルトは「教会教義学」の「創造論」の中でこの問題を真正面から取り上げ論じている。「教会教義学」Ⅳ／2 12章「創造者なる神の誠め」54節 1 「男と女」においてである。

以下にまとめたものは私が修養会に備えてバルトのこの論考を読みながら作ったメモである。バルトの「教会教義学」は(翻訳によるものを含めて)原文を読むに越したことは無い。しかし、George Hunsinger が How to read Karl Barth で書いているように、多くの人は彼の長く、複雑で果てしなく続く文章にうんざりして、彼の「教会教義学」を原文で読もうとする人は少ない。

ここに、このつたないメモも存在理由があると思う。バルトのキリスト教倫理における「結婚」の問題の論点を概観的に把握でき、ひいては原文への導入の役割を果たすことができれば幸いである。

## 1 人は他者と「わたしと君」の関係において人間となる

人間とは隣人なしには真の人間ではありえない。人は他者と「わたしと君」の関係において初めて人間になること。他者である「君」と「互いに見つめあい」、「互いに語りかけ」、「互いに助け合う」関係において人は真の人間となりうる。これが神が創造された人間性であり、人はこのことを「喜びをもって為すことができるように」創造されているのである。バルトは教会教義学Ⅲ／2・45節で「人間性の根源的な形態」としてこのように論じている。人と他者との関係におけるこのようなあり方が「結婚」の問題においても、その根底として存在している。

## 2 人間は男か女として生きるように定められている

人間は常に、男の人間あるいは女の人間であり、人間は誰でもこの関係から自分を解放することはできない。つまり、人間は自分が男として持っている一切のものの中で女に出会う。また、自分が女として持っている一切のものの中で男に出会う。女なしの男、男なしの単なる女であろうとすることはできない。

### 3 男と女の出会い

男と女の出会いという根本体験ほどに人間を強く刺激するものはない。彼が原始人であろうと、文化人であろうと、人間をこれほどに恍惚状態に陥れたり、我を忘れさせたりするものはない。しかし、まさにここにおいてこそ神の誠めが問題となる。根本において、自然な正しい男と女の関係とは何であろうか。

### 4 神の誠め

神の誠めということを考える場合、人は直ぐにこれこれのことが男の本質であるとか、これこれのことが女の本質であるとして、「お前は…すべし」とか「これがお前の課題である」といった風に類型化しようとするが、そのようなことは許されてはいない。人生はそのような類型化よりもはるかに豊かなものであり、したがって、神の誠めはわたしたちが考えるよりも遥かに多様なものであることを忘れてはならない。神の意志は十分に深く、豊かで命に満ちたものであるから、神のみ旨を自分勝手な思慮深さを振り回して乗り越えようとしてはならない。

### 5 男らしいあり方と女らしいあり方の限界

しかし、男らしいあり方、態度、行為と女らしいあり方、態度、行為との間には限界がある。神の誠めはこの限界をはっきりと表している。この限界はどちらの側からも飛び越えられてはならない。まことの男と女は自分たちの性から逃げ出してはならず、自分たちの性を誠実に表現すべきであるし、全く同じように喜びを持って自分の性の中で生きることがゆるされているのである。男と女の双方が互いに未婚者として、あるいは恋愛や結婚の中で結ばれているものとして、人間であろうとする際に、この両者が自分たちが男か女であることを十分に自覚しているだけでなく、誠実に自分たちの性を喜び続けている限り、一切はあるべき形で秩序正しく行われるのである。

### 6 互いに向かい合うこと

男と女は互いに相手に向かうように方向づけられている。彼らは互いに見合うべきである。つまり、互いに知ろうとすることである。捕らわれない目を持って、寛大な広い心を持って、常に学びながら、新しいものを発見するよう常に用意しているのである。人間的に生きるとは、自分自身の性が異性について驚異すること、自分の性が異性を理解したいと切に望むことを含んでいる。

男と女は互いに他の性によって問われている。男も女も、自分の性だけで満足することはできない。それぞれは各自の性によって与えられた能力や要求や喜びだけでは満足に人生を生きることができない。女はいつも男にとって常に刺激を与えるものであり、男もまた女に対してそうである。この不安にさせられることから身を引くことはできない。

男と女は互いに相手に対して応答しなければならない。男と女にとって、男だけ、あるいは女だけで存在する孤立存在は、ただ偶然的、一時的な仕方にすぎない。彼らは互いに向かい合うように方向づけられており、常に他者と共なる存在なのである。

### 7 男と女の間の秩序

バルトは男と女の秩序の問題を扱うに当たって、これはどのような言葉を用いても、誤解の余

地があり危険であると述べた上で、しかし、この秩序は存在することをはっきりと述べている。もし、男と女のそれぞれの存在において秩序が支配しないならば、無秩序が支配することになる。

ここで、秩序とはAはBの前に行き、BはAの後にくるという順序のことを意味している。男はこの秩序においてAである。男は女との関係において彼女よりも前にあるが、そのことは男に対して何の優越性も有利な立場も与えるものではない。このことは男はただ謙遜に男と女に共通に与えられている、連帯的人間性としての人間性の法則に、真っ先に身を屈することを意味しているのである。男は女と共に生きるべき人間として肯定し、彼女と共にあってのみ、彼は彼女との関係で第一のもの-----順序において第一のもの-----であることができる。

女はこの秩序の中ではBであり、その限りにおいて男の後にあるが、そのことによって男に対していささかも劣っていることにならず、いかなる権利や価値を放棄したことにはならない。この秩序は本来彼女が属している場所を示すのであり、彼女はこれこそ自分の位置であると誇ることができるものである。

バルトはこの箇所では、注の形式で、「キリストはすべての支配や権威の頭です。」（コロサイ2の10）と「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。」（ピリピ2の6）などの聖書箇所を用いながら、秩序の問題をキリストの権威と卑下の問題として論じている。男が女に対して権威の担い手である時、この権威は本来男に属しているのでなく、むしろキリストに属している。同時に、キリストは下位の順序の根拠である。女もキリストによって（下方に向かって）凌駕されている。まさに、イエス・キリストの福音の中でこそ、男と女の間における先行する秩序と後続する秩序、上位と下位の秩序が深く基礎付けられている。

## 8 倫理学

倫理学は神の誠めを-----男と女との関係の秩序を-----古いものであっても、新しいものであってもある体系の中にあてはめようとすることは許されない。倫理学はこの秩序が維持されず、破られている制度、習慣、あるいは人間的態度に反対するが、この秩序が維持されている制度、習慣、あるいは人間的態度に自己の立場を縛り付けることも許されていない。倫理学はこの秩序の光に照らして、善悪の問題を問うことのできる観点を示すことができるだけである。

## 9 結婚

結婚においては男と女の出会いの関係が、ひとりの特定の男とひとりの特定の女との一回的な繰り返されない出会いという形で固定化され、具体化される。これは男が女を、女が男をそのような生活共同体の唯一の相手として望み受入れあう愛の選びである。また、結婚はまわりの社会に対しても意味と責任を持っており、その承認を受けつつなされる。

(1) 人間と人間の間にこのような性格を持った関係があるということは、決して自明のことではない。結婚こそ人間の意思や行為の偶然性や恣意を超えて、神の召命の事柄として示されるものである。結婚の道へと決める決断が最高に特別な神的な召命の事柄であるとすれば、結

婚しないでいることを選ぶことも、同様に神的な召命の事柄である。

- (2) 結婚における交わりは自然にころがりこんでくるものではない。二人によって、深く考えられた、責任ある業として始められたものである。したがって、正しい結婚は理性的な結婚である。結婚を基礎付け、支えている愛は理性的な愛である。共に二人で生き、互いに伴い、互いに理解しあうことが大切である。生きることの交わりとしての結婚は第一にそれ自身を自己目的として真剣に受け取られなければならない。それ以外のこと、例えば性生活、男の快適さ、女の家政への熱心さ、子供などが、主要目的となるならば、それは結婚を破壊するように働く。生きることの交わりが主要な業として、結婚の中で正しくなされる時、これらの他の意図もその目標を達成することができる。
- (3) 結婚における生きることの交わりは完全なものである。二人のものが新約聖書の概念の意味するとおり、「ひとつのからだ」となることを意味している。二人のものはその不同性の中で、互いに愛し合い、敬い合う。結婚はこの相互に与え合う自由の中での交わりである。彼らの交わりが自由の中での交わりであり、あり続けるとしても、その責任はまず、第一に男の事柄である。しかし、これは男が女よりも多くのもの、より偉大なものであるための先行ではなく、それは彼女のため、彼女が彼の後に続き彼女自身の自由へと向かうためなのである。
- (4) 結婚は排他的な生きることの交わりである。愛すること (*diligere*) は選ぶことを意味している。ほかの女ではなく、ひとりの女を、ほかの男ではなく、ひとりの男を選ぶことを意味している。結婚はその本質からして一夫一婦制である。人は信仰の中で、言いかえれば神の契約を、神の自由な選ぶ恵みを、感謝をもって肯定する時、このことを信ずることが許される。旧約聖書の中で、一夫多妻が何のためらいもなく生きられていたのに対して、新約聖書の中では一夫多妻は、まるで一撃のもとに消滅してしまっているのは注目に値することである。
- (5) 結婚は永続的な生きることの交わりである。「神が合わせられたものを、人は離してはならない」(マルコ10・9) という決断が下される。「合わせる」は「一緒にくびきにつないだ」の意味であり、ある一つの課題、仕事の前に置かれたことを意味している。もし、人が結婚を永続的なものとして理解しないで、「友達付き合い的な結婚」「試験期間だけの結婚」として理解するならば、それは恋愛遊戯である。二人のものは彼らの結婚の永続性の根拠を神の恵みの言葉の中で、繰り返し尋ね求め、神から繰り返し感謝して受け取る。
- (6) 異なった性の二人の人間が互いに愛し合うこと、それも相手を単なる同胞としてではなく、むしろ生きることの交わりをめざした愛の中で互いに相手を認識し、選び、愛し合うことの中で結婚は成り立つ。愛とは一人の男と一人の女が、神によって結婚という生きることの交わりへと、共に合わせられ、そのようにして互いに自分たちを結婚へと召され、賜物を与えられているものとして理解し、与え、切望し合うことがゆるされる自由な決断のことである。この愛はエロースの概念で表すことができる。まことのエロースとは与えることが先行する。

自分が他者のものであり、他者に属そうと欲する喜びが止揚され、自分の事柄を他者の事柄としようとする熱心さが先行する。二人の未信者、信仰の違った二人を「合わせる」のは神の秘儀であり、神の恵みの行為である。しかし、信仰と信仰において一つであることが、一人の男と一人の女の間でまことの愛に至り、結婚の基礎づけとなるものである。

- (7) 結婚は単に私的な企てとして遂行されようとしてはならない。結婚が成立するようになることは、外に向かっても、人間的な周囲の環境にたいしても責任ある行為という性格を持っている。二人のものが恋慕から愛へ移って、結婚が出来事となって起こったということは、家族的、法律的、教会的な交わりの中で、他の円から区別された特別な円が基礎付けられるということになる。

#### 10 神の裁きと許し

人は固有な内容と鋭さをもって、すべての人間に与えられている神の誠めを喜ぶ。なぜなら、それはイエス・キリストにあって与えられる神の誠めであり、人はその誠めの中に、良い羊飼いの声を聞くからである。

人は結婚というすばらしい、奇しき、しかしまた危険な、誘惑され易い、迷路に満ちた領域において、慰められ、保持され、担われ、導かれているのを見出すのである。しかし、神の誠めの光の中で、神の誠めを満足に遂行している完全な結婚が一組だけでもあるであろうか。

ここでも又、人は彼を永遠から愛され、み子の十字架の上で、彼の罪のために責任を身に受けられ、彼の罪を赦してくださる方の下に立っているのである。このようにして彼は神の誠めを守ることを許されているのである。

バルトはここでヨハネ 8・3～11の姦淫の女の物語を取り上げる。「わたしもあなたを罰しない」と言われたイエスは、神の恵みの律法の起草者および注解者としてここに立っておられる。イエスご自身が律法にそむいた女のために責任をとることで、この女をゆるすのである。「行け、これからはもう罪を犯さないように」というイエスの言葉は、恵み深い神の裁きによって、神の律法の違反者であるままで、すでにイエスの中で、「永遠の義と純潔と祝福」の状態へと移されていることを意味している。

#### 参考図書

- |   |                  |                           |                                     |
|---|------------------|---------------------------|-------------------------------------|
| 1 | Karl Barth       | Mensch und Mitmensch      | Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen |
| 2 | Karl Barth       | Kirchliche Dogmatik III/4 | EVZ Verlag Zürich                   |
| 3 | カール・バルト          | 教会教義学 創造論Ⅱ/2              | 新教出版社                               |
| 4 | カール・バルト          | 教会教義学 創造論Ⅳ/2              | 新教出版社                               |
| 5 | George Hunsinger | How to read Karl Barth    | Oxford University Press             |